

この旅で二度目になる庚定に向うバスに揺られながら、私の心はわき上がる嬉しさで踊っていた。これから旅の第二部が始まろうとしているところだった……。

きっかけは登山だった。

今年の7月、山と自然と高山植物が好きな有志十数名で、中国四川省の名峰四姑娘山麓をめぐる旅に、ギリギリになってから飛びこみ参加するのを決めたのだ。

春の終わり頃、母から中国に行くという話を聞いた時には、自分がその旅に同行するとはまったく思っていなかった。ところが後になってから今回の旅で、四姑娘山の末娘『大姑娘山』に登ると聞いてから私の心は大きく揺れ始めてしまった。

四姑娘(スークーニャン)山はその名の通り、四姑娘、三姑娘、二姑娘、大姑娘と四つの山が高度の高い順に姉妹の様に並んでそびえている美しい山で、大姑娘が一番低いといっても5000メートルを超える高山だ。登山の楽しさに目覚めたばかりの私は、とにかく高い山に登ったという事が自慢の種になるような気がして、旅の日程表にもロクに目を通さずに参加を決めてしまった。

そこがどんな場所かも知らずに、皆に着いて行った四姑娘山麓は美しい土地だった。雪を頂いて輝く四姑娘山が眼前にそびえ、色とりどりの高山植物がまるで絨毯のように野を埋め尽くしていた。そして、自然の美しさもさることながら、この土地の人は誰もが優しい。旅の随所で出会った微笑みを絶やさないう暖かい人たちと、車窓から垣間見られる彼らの穏やかな生活風景に、私はぐんぐん引き付けられていった。

旅の目的であった筈の大姑娘登山を果たし麓の村に戻ってきた時には、私の心を最も捉えていたのは、登頂の喜びよりもキャンプ生活を影で支えポーターとして私たちの登山に付き添ってくれていた、チベット族の少女の笑顔と優しさだったように思う。ほとんど会話らしい言葉も交わす事はなかったが、彼女の心配りには「仕事だから」という以上の暖かさが感じられた。

旅の日程も折り返し地点を過ぎ、この旅も一段落といったある日、移動の車は美しい景色の流れる道をゆるやかに走っていた。やや埃っぽい村の風景が、傾きかけた日差しを浴びて暖かい色に光っていた。石と泥でつくられた小さいお城のような可愛い家が、ぽつぽつと立ち並ぶチベット族の村はまるで童話の挿絵の様に美しい。

ガードレールも無い道路を、泥んこで駆け回る子供達。顔も服も真っ黒に汚れているが、彼らの表情は弾ける様に明るい。それを日向ぼっこしながら見守る老人。通り過ぎりの旅人にもおだやかな笑顔を向けてくる村人達。家畜が柵に囲われる事も無くのんびりと道路を歩いていた。なんだか人も動物も自然の中にとけ込んでいて、その境目というのがあまり明確ではないような、自然と一体になっている生活とでもいえばよいのか、そんな印象を受け、見ているだけで胸の中が暖まってくるような気持ちになった。

時おり道路をふさいで座り込んでいる牛もいるが、この土地の運転手は笑いながらスピードを落して

クラクションを鳴らす。「危ないからちゃんと繋いでもらわないと困るじゃないか！」ここではそんな事を言う人もいないのだろう。

それは必ずしも良い面ばかりではないだろうが、何かと目くじらを立て規則に縛られてギスギスした人間関係に陥りがちな現代の日本が、物質的な豊かさと引き換えに失ってしまったもの……かつての日本も持っていたに違いない穏やかさというようなものが、彼らの生活の中にはいっばいに満ちているように思われた。

幸せって何なんだろう……使い古された様な言葉が心の中に浮かんでくる。

もっとゆっくり彼らと交わってみたい、バスの窓から見下ろすのではなく同じ目線で村の生活に触れてみたい。そんな気持ちが日増しに募ってくるが、スケジュールに合わせて日程をこなしていかなければならない団体旅行では、どうしても時間や行動範囲に制約が出てしまう。旅の後半に入ってから、私の心の中ではある気持ちが固まりつつあった。……まだ帰りたくない。

幸いと言うべきか、情けないと言うべきか、勤めていた仕事を辞めて今回の旅に参加していた私には、別に急いで帰国しなければならない理由は無いのだった。

『帰りの航空券をもう一度買えば良いだけの事じゃん…！』

中国に関しては、今回を含め、二度ほど他人にプランニングしてもらった旅に参加し、皆についていただけなので何の知識もなかったが、海外を一人旅した経験は数度ある。一人で行動できる自信はあった。

新宿、大久保という外国人の吹き溜まりのような街で、数年間飲食業を生業としてきた経験により、中国語も日常会話初級程度なら何とかいける。それに加えて、中国の四川省には私が心の隅でひそかに温め続けていた、どうしてももう一度行きたい思い出の場所があるのだった。

三年前の夏、わりいでもおなじみの鳥里鳥沙氏のプランニングにより、半月程の日程で四川省の東チベット地方をめぐる「最後のシャングリラ」とも呼ばれる亜丁自然保護区を訪れる旅に参加した。

『チベットに行くんだよ』という母の言葉に、即座に『ラサ』という地名を思い浮かべ、『私も行く！』と叫んで参加を決めたのだったが、何事につけても大雑把な私は、旅行について深く尋ねる事もせず、いわれるままに旅費を振り込み、後になってから簡単な旅程表を母に手渡されて初めて、目的地がチベット自治区のラサではなく中国四川省である事を知った。

その時の気分はハッキリ行って『騙された〜！』と言うものだった。大久保という街で、比較的ガラのよろしくない中国人に囲まれた生活環境にいた私にとって、中国のイメージはあまり良いものではなかったのだ。しかし、実際に行ってみた四川省山岳地帯の世界は、私が思っていた中国とは人も文化もまったく違っていた。

中国の中にこんな世界があったなんて……！それは全く目からウロコが落ちる思いで、騙された、騙されたとブツブツつぶやいては『自分で行きたいと言ったんでしょ！』と母に怒鳴られていた私は、そんな事はアツという間に忘れ、旅の途中からはすっかり夢中になってしまった。

そして訪れた最終目的地である「最後のシャングリラ」亜丁自然保護区。ほんの二日間滞在しただけのその場所が、その後ずっと忘れられない場所として私の心の中に深く潜んでいた。

思えば、その旅の帰り道も今回と同じ事を考えていたのだ。旅の日程は終わりに近づいていた。四川

省チベット圏の玄関口といわれる康定の街を出れば、後は成都に向かい日本に帰るだけというバスの中で、私は切なかった。

道路工事の影響か、押している日程を取り戻すためだったのか、夜を徹して成都に向うというバスの出発は黄昏時で、道は渋滞していたためゆっくり康定の街と別れを惜しむ事ができた。バスの窓からこの街で生活している人々の日常の風景が見えた。道端で中国将棋に興じるもの、リヤカーで炭を運んでいるもの、街角の食堂から立ち上る湯気、崩れそうなビルの雑貨屋。私は今すぐバスを飛び降りて自分もその風景の一部になりたかった。

いつかきっと一人でここに帰ってきたい…もっと自由に気に入った場所に滞在し、好きなように街や村を歩き回りたい…そんな気持ちをかみしめながら、バスの車窓を流れていく康定の街をぼんやりと見つめ、センチメンタルな気持ちに浸っていたことを思い出す。

そして今回、突然その希望をかなえるチャンスがめぐってきたのだ。突然といっても、心のどこかで薄々そうなる事を、自分に期待していた私は、抜かりなく貴重品を入れた胴巻きの中にクレジットカードを忍ばせていた。これでとりあえず、帰りの航空券を買うためのお金の心配はいらぬ。航空券代はちょっと痛い出費だが、それ以上にこのチャンスを逃したくなかった。

そんな私の気持ちを後押しするように突然フラッと現れたのは、私を四川省の世界へといざなった仕掛け人、烏里烏沙氏だった。今回も皆で旅の最後を過ごした康定の街を出て、成都に向うバスに今まさに乗り込もうとしたその時にである。

考えてみれば彼は康定出身の人なので、そこに居てもそれほど不思議は無かったのだが、今回の旅には過去に烏里氏と中国を旅したことのあるメンバーが何人も混じっていて、思わぬところで知人に出会い皆ビックリしていた。私は思わず烏里氏に駆け寄り、「一人で亜丁まで行きたいんだけど、大丈夫かな？」と尋ねると、「何かあったら電話して良いよ」と自分の名刺に携帯電話の番号を走り書きして渡してくれた。

旅の一行は成都に戻り、私は一緒に参加していた母に居残りの決意を告げた。私の性格を熟知している母は、最初のうちこそ難色を示したものの、言ってもムダだと思ったのか『まあ、気をつけて行っていらっしやい』と言うと使い残りの中国元を渡してくれた。

【続く】